

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
プロジェクト研究（自由プロジェクト研究）
2011年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	浦野聡	印
研究課題			
研究組織	所属大学名等・職名	氏名	
	東海大学産業工学部教授	渡邊道治	
	千葉商科大学商経学部教授	師尾晶子	
	立教大学文学部教授	深津行徳	
	立教大学兼任講師	志内一興	
研究期間	2010年度	～	2011年度
研究経費	2010年度	2011年度	総計
	2065千円	2900千円	4965千円

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

トロスでは、キリスト教の国教化に伴い、都市主神の中心聖域に司教座聖堂が建設された。研究の最終目標は、古代異教の聖域からキリスト教の聖域への転換過程の具体相を明らかにすることだが、本プロジェクトでは、その前段階として、聖堂遺構の発掘を通じ教会聖堂自体の歴史的変容過程、とりわけ聖堂放棄にいたる経緯の具体相究明に努めた。すなわち、教会遺構区画の表土を北側廊から北翼廊にかけ床上10～20センチレベルまで除去し、床面レベルにトレンチを入れることで、聖域＝聖堂空間を焦点にした空間構成再編成に関する考古学的、碑文学的、建築史的、美術史的データを、組織的に収集し、この教会聖堂が4・5世紀の創建になること、ビザンツ中期に墓所として転用されていたらしいこと、12世紀末から13世紀にかけてセルチュクの到来とともに放棄され倒壊にいたったらしいことを明らかにした。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[古代・中世都市] [古代末期キリスト教] [聖域と聖堂]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

二〇一〇年度調査は、トルコ共和国アクデニス大学のタネル=コルクート教授総指揮の下、二〇一〇年七月九日～八月二〇日に行われた。参加者は、代表者浦野のほか、金指もと子(立教大学学生)、寺内正明(蓮田市役所)、深津行徳(立教大学)、師尾晶子(千葉商科大学)の5名である。作業詳細は次の通り。

- I 七月九～三十一日 前庭部、聖堂内入り口部のクリーンワーク。アクデニス大学タネル=コルクート教授に委託
- II 八月六日～九日 トロス遺跡出土碑文の検討(浦野・師尾)
- III 八月一〇～一四日 トロス遺跡教会の実測(寺内・深津)および、教会内遺物のナンバリング(浦野・金指・師尾)
- IV 八月一六・一七日 教会内柱礎石列の実測(金指・寺内・深津・師尾)および教会内遺物の実測(浦野・金指・寺内・深津・師尾)
- V 八月一八・一九日 出土土器の実測(浦野・金指・深津～一九日)および碑文調査((浦野・師尾)

上記Iの過程で、墓3基が、前庭(もしくは拝廊)部南部分、地表下40センチから、発掘された。それぞれ成人人骨4体を持つA、成人人骨2体を持つB、乳児人骨2体を持つCの三基である。12世紀から13世紀のビザンツ時代後期の陶器片がB墓郭内から出ていることから、現在のところその前後の時代のもものと推察しているが、遺骨の上部から出てきたものであり、墓の築造年代特定については、聖堂の放棄時期の確定を待たねばならない。

また、この作業の過程で、聖堂の西側の壁から聖堂内部に3メートルのところまで表土除去を行った。側廊と身廊を分かち柱列は、腰高の仕切り(パラペット)で区切られていたことが発掘前から確認されていたが、今年度の発掘により、入り口から最初の柱にいたるまでの仕切りは、セメントで固めた幅広の腰高仕切り壁となっていたことが確認された。この腰高壁は、フレスコ画の残存状況から、西側の入り口がある聖堂内壁面に対して、後代に取り付けられていることが明らかになった。すなわち、聖堂内壁面は、彩色の漆喰で塗られていた痕跡があるが、仕切り壁は、その漆喰面に接するよう形で取り付けられているからである。フレスコ画には仕切り壁設置以前に塗り重ねられた形跡があり、したがって少なくとも入り口付近では、腰高仕切りの設置までに相応の時間の経過があったと考えられる。また、仕切り壁には、幅1メートル弱、左右の側廊から身廊に抜ける戸口が開けられているが、そのうち北側の戸口の敷居石は、2世紀から3世紀にかけてのものと思われる碑文を有する切石が転用されていた。

さらに聖堂外側のクリーンワークから、少なくとも2種類の外構の痕跡が見出された。ひとつは聖堂の南側側廊の外側に、翼廊の右翼の幅と一致する形で細長く建造物が取り付けられているものである。この建造物は、構造的に聖堂本体とは独立して取り付けられているので、聖堂それ自体より後代の増築と考えられる。もうひとつは、アプシスの左右、翼廊外側の付属部屋である。この部屋は、切石の組み方から、アプシスと構造的に一体となっていることがわかるので、アプシスと同じ時期の建築であろうと推測される。すなわち、聖堂建築当初から存在した祭具室等の痕跡と考えられる。

上記IIの過程で、15点の新発見の碑文が確認された。工房の印と考えられる引っ掻き文字(graftito)一点をのぞいて、今回目にするのできた碑文はすべてヘレニズム期からローマ帝政期までのもので、いずれも聖堂建築の部材として再利用されたものであった。(一)～(五)と(一五)以外、いずれも、二〇一〇年シーズン終了後、保護のためにアンタルヤ博物館に運ばれた。

上記III・IVの過程で、聖堂遺構全体の平面図1点、側廊と身廊の仕切り壁の立面図4点を作成した。また、主要部材の散乱状況を記録するための図面を、聖堂内部と前庭部、聖堂外構部について各1点を作成し、聖堂内部については、聖堂全体を24区画に分割して縄張りをし、より詳細な配置図を作成した。

上記Vの過程で、発掘済みの部分から出土した土器25点について実測図を作成した。また特徴ある金属器、土器については、写真を撮影した。多数のローマ期、古代末期の実用陶器に混ざって、12世紀のものと考えられるビザンツ期彩釉陶器が聖堂内からも発見されている。

二〇一一年度調査は、トルコ共和国アクデニス大学のタネル=コルクート教授総指揮の下、二〇一一年六月二九日～八月二日に行われた。参加者は、代表者浦野のほか、田中咲子(南山大学講師)、太記祐一(福岡大学)、深津行徳(立教大学)、師尾晶子(千葉商科大学)の5名である。作業詳細は次の通り。

研究【経過・成果】の概要 つづき

- I 六月二九～七月九日 聖堂内北側廊部、北側翼廊部のクリーンワーク。トルコ隊に委託。
- II 七月一〇～一七日 トロス遺跡教会外構・内構壁体の実測。平面図作成(太記・浦野)
- III 七月一〇～一七日 トロス遺跡出土碑文の検討(浦野・師尾)
- IV 七月一八～三一日 教会内出土遺構(腰高仕切り壁、小祭壇、内構壁体の実測。立面図スケッチの作成。
(浦野・田中・深津・師尾) および教会内遺物の実測
- V 七月二五～二八日 レリーフ調査(田中、浦野)
- VI 七月二六日 墓地一部発掘(師尾、田中、浦野、深津)
- VII 七月二八日 翼廊部・祭壇部境界における床面モザイク試掘(田中、深津、浦野)
- VIII 七月二九～八月二日 壁面フレスコ調査(田中、浦野)
- IX 七月二九～八月二日 出土土器の実測(浦野、田中、深津)
- X 三月九～二八日 オックスフォード大学サッカー図書館におけるビザンツ陶器関連書籍調査、およびパペラ・アームストロング博士との写真によるビザンツ陶器の検討(浦野、師尾)、チャールズ・クラウサー博士との写真による碑文検討(師尾、浦野)

以下、研究成果の概要は、紙幅の制限があるので、国際的に速報価値が高い英文にて記す。

The site of the Tloan (plausibly episcopal) church occupies the northern part of a terrace (35m x 50m; 3m above of the *palaestra* and the baths respectively to the west and to the south), the supposed ancient *temenos* in the southern part of which the Kronos temple was located. Its ground plan is a so-called pseudo cross-transept with a spacious atrium instead of a *narthex*, similar to those of the main churches in Perge and Patara, while its construction method and materials much resemble to those of the Xanthian basilicas.

In 2011 season, rubbles were removed from the entire area of the north aisle and transept down to the level (472.760m) which roughly agrees with that of the threshold of the passage from the aisle to the nave (472.755 m). As a result of this work, it turned obvious that the north transept had been later divided into three rooms (Room 1-3) by three partition walls (PW 1-3) in different times; they are intersected each other at the piled cuboid block (covered with remnants of lavishly frescoed plaster) which is thought to have supported the timber roof over the north transept. The side entrances of (or doorways to the still unattested extensions from) the aisle and the transept were later blocked off. The quality and accuracy of their masonry (of mortared stones and bricks piled up alternately) is poorer than that of the outer walls (also of mortared stones and bricks); PW 3 is attached to the north outer wall not at the right angles, while each outer wall is set up carefully almost in line and intersected to each other at right angles. The wall between Room 1 and 2 is far thinner and of poorer quality masonry with less glue of mortar.

Alongside PW 3 in Room 1, four brick/stone piles, perhaps altars (Altar A-C, E) with remnants of frescoed plaster were found. Immediately beneath the ground between these altars (A, B, E), human bones were found scattered over slate-covers of the supposed two tombs (which were not excavated in this season). These facts allude to the plausible possibility that Room 1 was used as a burial chamber in some time when or after PW3 was constructed. On the same level as these bones were found, fragments of later middle Byzantine glazed pottery (12-13th centuries) were excavated, some of which were discovered on the threshold of the nave stained with ashes of remains of fire. Remarkably discovered were fragments of late antique or Byzantine religious furniture with reliefs (those of the templon?) near the altars (a limestone slab with at least four winged crosses respectively representing each apostle carved, and others with cross-reliefs). They seem to have been reused after their being damaged from unknown reasons. At the moment, it is not clear how old they are and for what purposes they had been used before and after their being damaged.

In Room 2, there was held the trial digging of floor mosaics which emerged at about 0.10 m below the present ground level (472.744m).

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 浦野聡「トロス司教座聖堂の発掘について」、『史苑』71-2、2011年3月、八一一一〇三頁

師尾晶子「二〇一〇年度発掘調査によるトロス教会聖堂出土碑文の概要」、『史苑』71-2、2011年3月、一一五一一二二頁

深津行徳「都市と祭祀空間 ―二〇一〇年度トロス司教座聖堂予備発掘調査報告―」、『史苑』71-2、2011年3月、一〇四一一二頁

浦野聡「トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一一)―建築上の所見を中心に」、『史苑』72-2、2012年3月、一一三一一三一頁

田中咲子「トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一一)―聖堂装飾遺物を中心に」、『史苑』72-2、2012年3月、一三二一一五五頁

師尾晶子「トロス司教座聖堂出土碑文の概要(二)―二〇一一年度の発掘から」『史苑』72-2、2012年3月、一五六一一六二頁